英語科編２１

第１２１号
平成２２年３月５日

４３　現代アメリカ文学と日本

向井　俊二　昭和２６東京文理科大卒在職昭和２６～３０　神奈川大教授

向井俊二は、昭和２６年、東京文理科大学を卒業すると、すぐに附属中の教官となりました。東京文理科大学は昭和４年に創立され、昭和２８年３月に最後の卒業生を出したので（閉学式典は、翌年の三月に実施されたようである）、向井は、文理科大学の終わりのころの卒業生です。その意味では、東京高等師範・文理科大の伝統を引く末期の卒業生といってもよいと思います。

ところで、向井には、『開拓者の後裔』という好著があります。副題は「現代アメリカ文学試論」となっていますが、その内容は、もちろん著名なアメリカ文学、例えばアーサー・ミラーの『セールスマンの死』やサリンジャーの『ライ麦畑の捕え人』のような作品等を論じていますが、その中に向井の感じている日本文明批評が述べられてもおり、単なる文学論ではないことに感心させられます。幅広い教養に支えられた作品となっています。

向井俊二著『開拓者の後裔』北樹出版　昭５６

４４「英語の勉強は練習ですよ」

佐藤　喬　東京出身昭和２８東京教育大卒　在職昭和２８～４０慶応義塾大教授

東京教育大学は、昭和２４年に開学となり、その第一回卒業生は、昭和２８年ということになります。その第一回の英文学科の卒業生が佐藤喬です。東京教育大学の文学部にどのような学科があり、どのような特色があったかについては、『東京教育大学文学部記念誌』（１９７７刊）や鈴木博雄著『東京教育大学百年史』（図書文化・昭和５３）、また、英文学科については、これまで数多く参考にさせていただいた、『ある英文教室の１００年』に詳しいので省略しますが、どの著書を見ても、比較的明るい、のびのびとした雰囲気をもった学科であったようです。佐藤は、そのような基礎をつくった第一回の卒業生でもあり、教官になってからの彼の教育の在り方も、戦後の教育にふさわしいものであったことは、卒業生などの回顧録にあらわれています。向井、佐藤と続いた戦中・戦後派の教師の動向が、戦前のパーマー以来の英語教育とむすびついて、附属中の新しい英語教育をつくりはじめました。ところが、田崎清忠の思い出によれば、佐藤は、中学生の先生というタイプではなかったようです。それは、次のような場面によく現れています。

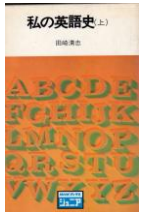
「佐藤先生のところにも時には生徒が相談にやってきた。「先生、英語の勉強の仕方を教えてください。」「ふむ。第一に練習をよくやることだなナ」「はい。それからどんな風にやればいいんですか？」「さよう。練習をすることが第二に大切だ。」「だめだな、先生。それは『第一』でしょう？」「うん第一も第一と同じだよ。」・・・「第二は？」「第二も練習することだ。」・・・生徒はここまで聞くとたいていフクれた。」（田崎清忠著『私の英語史』ＮＨｋブックス昭和４９）

佐藤は、その後、慶応大学の教授として転任していきました。

４５　ＮＨＫテレビ英会話１６年

田崎　清忠　東京出身　昭和２７東高師卒在職昭和３０～４１　横浜国大教授

ＮＨＫのラジオ講座が岡倉由三郎らにより始められ、戦後は、平川唯一の「カムカムエブリボディ」という英会話に変わり、さらに、松本亨に引き継がれていきましたが、新しくテレビで始まった英会話番組を長らく勤めたのは、田崎清忠です。

戦中に小学校時代・中学校時代を生きた田崎が、英語に興味を持ったのは、飛行機好きが原因でした。彼はもともとは東京の北区の生まれです。その彼が、１９４３年に、小学校を卒業すると、まよわず好きな飛行機を作らんとして、「東京都立航空工業学校航空機科」に入学しました。そこで、後々まで英語の恩師となる今石先生（後に広島女学院大教授）に、入学式の翌日の英語の時間に、英語の大切さを教わったことにあります。しかし、このことは、戦中でもあり、すぐに忘れてしまったようですが、後に思い出すこととなります。さらに、田崎が、英語の必要性を感じたのは、疎開で茨城県の古河に移ったこともきっかけとなりました。茨城県の古河市の郊外には、小さな飛行場があり、これを占領するために、アメリカ軍が進駐してきたことです。彼は、そこで、飛行場を占拠していたアメリカ軍の歩哨・門番と顔を合わせ、何とか、「彼と英語でひとことでも話せたらいいなァ」と思い、「グッド・イヴニング」からはじめて、「グッド・バイ」までの挨拶をするようになると同時に、猛烈に英語が喋れたら、と感じるようになりました。そして、ラジオで平川唯一の英会話があることを知り、熱心な聴取者となりました。

田崎はその後、学費が安いということで、東高師に入学し、昭和２７年卒業、そして、第二のふるさとともなった古河一高の教師となりました。そこでの教師生活において、田崎は、業者が持ってきたテープレコーダーに興味を示し、それを英語の授業で用いることを研究しました。当時、テープレコーダーのような機器も珍しいだけでなく、それを英語の授業で用いることなどは誰も実践しておらず、田崎は、東京教育大学の黒田巍教授や藤井一五郎教授らの参加も得て、その利用に就いての研究授業を行ないました。そのことがあってか、田崎は、附属中学の教官として招聘されることとなりました。附属中学の教官となった田崎は、社会科のオーシャンこと、山本幸雄教官の授業を見て、「話の間」やその博識になるための研究をするなどのことをしながら、後にテレビの英会話講座で活躍しました。　田崎の著書はたくさんありますが、彼のおもな経歴・英語に対する思いなどは、次の著書に一番書かれています。田崎清忠著『私の英語史上・下』ＮＨＫブックスジュニア昭和４９　下は、向井俊二の著書